【写真上】それぞれの熱い思いを語ったパネルディスカッション。
【写真右】火山とともに生きることの大切さを話した藤井教授。

▲「霧島ジオパーク小林宣言」には、兒玉夏歩さん（小林小６年）、吉村光正さん（小林小６年）、吉國葵さん（南小６年）、野添壱星さん（小林中３年）、轟木亜悶さん（小林中３年）、海江田理湖さん（小林中３年）が参加。

共に力を合わせて 環霧島会議および火山防災・復興フォーラム開催

◀キリッチ

５月13日、文化会館で第８回環霧島会議が開催されました。総会では、新燃岳噴火に伴う影響と取り組みについて、防災や観光など各専門部会から報告。また、その後開かれた霧島ジオパーク推進連絡協議会の総会では、公式キャラクター「キリッチ」が決定したことなどが報告されました。

また、午後からは火山防災・復興フォーラム「火山の麓にくらす～新燃岳の噴火から学ぶこと～」を開催。講演では、火山予知連絡会会長の藤井敏嗣東京大学名誉教授が「火山噴火予知と防災」と題し「活火山は必ず噴火するが、噴火しないときの方が長い。火山の恩恵を十分堪能し、火山とともに生きることを自覚することが大切。ジオパークであることを活用してほしい」と話しました。

その後、ＮＰＯ法人環境防災総合政策研究機構の事務局長理事である松尾一郎さんをコーディネーターに６人のパネリストを向かえパネルディスカッションを開催。ジオパークを防災にどう活かすかについて、それぞれの立場から活発な意見が出されました。

そして、最後に肥後正弘小林市長や市内の小中学生など16人が「霧島ジオパーク小林宣言」を読み上げました。「噴火からの復興をすすめるうえでも、地域活性化を目的としたジオパーク活動を推進するとともに、世界ジオパーク認定を目指し、環霧島地域で暮らす人全員で力を合わせて頑張っていく」と力強く宣言。会場からは大きな拍手が起こりました。

【写真左上】火山灰を使った商品展示に来場者は興味津々。【写真上中】大地震を体感できる起震車には長蛇の列。【写真右上】災害派遣で活動する自衛隊車両を展示。【写真左下】地域の防災を担う消防団車両も展示。【写真右下】赤十字と地域婦人連絡協議会の皆さんは非常食の試食コーナーを開設。

ハーブ・薬草で豊かな食生活を提案します。ハーブ祭り開催

５月15日、薬草･地域作物センターでハーブ祭りinのじり12thが開催されました。市内外から2,000人が来場し、草花とハーブの寄せ植え教室や薬膳料理教室、薬草クイズラリーなどに参加。結城利幸所長は「薬草やハーブに親しんで、香りと彩りのある豊かな食生活に役立ててもらいたい」と話していました。

「ボタンやユリと並んで、美人の形容としてたとえられる婦人病の薬草は？」などといったクイズを解きながら、園内を周りました。

【写真上】野尻の特産品、めろめろメロンや完熟マンゴーが当たった○×クイズ大会。
【写真下】薬膳料理教室

県内の道の駅も物産を販売。ゆ～ばるのじり10周年記念イベント。

産学官連携でまちづくりを研究 小林市活性化研究会を設置

５月14日、小林市活性化研究会が文化会館で開催されました。これは、大学、市民および行政が基本的なまちづくりの方向性を見出すために共同で研究し、施策に反映することで市の活性化を図るために設置するもの。アドバイザーに中央大学総合政策学部の細野助博教授を迎え、９人の委員に委嘱状が交付されました。

会議では細野教授のゼミの取り組みが紹介され、委員からは質問や意見が出されるなど、活発な意見交換が行われました。

つるばらの一般公開は２年ぶり２回目。会場ではつるばらの苗や、堆肥で育てたトマト、じゃがいも等の販売も行われました。

色とりどり60品種のつるばらを一般公開

のじりアグリサービスで60品種約110本のつるばらが一般公開されました。つるばらは、４年前から施設周辺の景観向上と堆肥の効果検証を目的に栽培。園田正明所長は「今年は２万人を越える人出。堆肥を使って育てたつるばらを通して、完熟堆肥の宣伝になれば」と話していました。